

現場レポート

“農と食”北の大地から

連載第68回

都市農業のすそ野を広げる「さっぽろ農学校」



新たな担い手や“農業応援団”を育て、明日にむけて確かな手応え

ルポライター 滝川康治



野菜や花の栽培技術の習得などを通じて、新しい都市農業の担い手や農業応援団をつくることを目的に、01年から札幌市が開校してきた市民農業講座「さっぽろ農学校」に人気が集まっている。今年からは定員を増やしたことで、家庭菜園のレベルアップを謳うとする人も目につく。実習の現場に足を運んで受講生らの話を聞く一方、修了者によるNPO法人の活動や農場経営の取り組みを紹介し、「小さくても楽しい農業」の可能性を探った。

菜園のレベルアップや就農めざして実習に励む

七月中旬の土曜日、サッポロさとらんどのある実習圃場では、「さっぽろ農学校」の専修コースの受講生たちが野菜の収穫作業に励んでいた。「まだ軟らかいので、レタスを持ち上げるように鎌でスポンと切ってください」というアドバイスを受けながら、慣れない手つきで丁寧に収穫していく。品種の選び方や育て方などについて講師の解説を聞いたあとは、一人十五坪ほどの自主管理圃場での実習が続く。午後は講義があり、一日がかりでみっちり学ぶ。

受講生は二十代〜七十代の札幌市民三十二人(うち3割が女性。これとは別に入門コースもある)。家庭菜園のレベルアップを求めて受講する人が多く、新規就農の希望者も五人ほどいるという。「うちは農的な暮らしをしていて、梅干しや味噌、乾燥野菜なんかを自分たちで作るんです。自宅の庭先に野菜の苗を育て、冷え込む夜はベットのポットに入れたお湯で保温していますよ」

こう話すのは医療関係の仕事をしている南区在住の徳田取さん(1968年生まれ)。佳織さん(72年生まれ)夫婦。市内の非農家で育った二人は、自主管理圃場を五区画も借り、野菜づくりに精を出す。目下、兼業農家をやるかどうか模索中で、「小まわりの利く農業」を実現したいと張り切っている。

年配の受講生も多い。札幌市内で建築会社を営んでいた二階堂哲也さん(33年生まれ。北区在住)は、息子に経営を譲ってリタイア。もともと留萌管内小平町の農家出身で、いまは二百坪ほどの土地

農畜産物に対する人気が高まってきた。「さっぽろ農学校」は、農業に関する知識や栽培技術の習得を通じて新しい都市農業の担い手と農業応援団をつくることを目的に、市農政課が〇一年に創設した。昨年までは「基礎コース」と「応用コース」(基礎コースの修了者が対象を設け、遊休農地対策を視野に入れた二年間(夏場の必就農研修)を続けてきた。

今年からは一年間の講座へと衣替えを図り、圃場の日常管理や講座の準備は造園会社に委託。日曜日の午前中、野菜づくりの知識とコツを講義で学ぶ「入門コース」(定員100人)と専修コース(同30人)を設けている。

ここを巣立ち、市内外で本格的に就農した人は十一人。各期ごとにグループをつくって情報交換を図る、農学校のボランティア講師を務めるなどの形で農的暮らしを実現している人も多い。

一昨年、修了生の有志によってNPO法人「さっぽろ農学校倶楽部」(宮本隆理理事長・会員33人)が誕生した「札幌で就農するための試み(06年8月号)」を参照。農地関連法の改正でNPO法人などが農業に参入しやすくなったのを受け、生産者と消費者がつながり、市民に農業を知ってもらうという立ち上げたものだ。「さとらんど」での取材の翌日、小林峠に近い南区北ノ沢にある同倶楽部の農場を

「キノコは大きいほうが美味しいんですよ」という講師の伊藤登三男さん(中史の説明に真剣に耳を傾ける「さっぽろ農学校」の受講生たち(写真右、7月19日、サッポロさとらんどの実習圃場)。レタスの収穫のコツも学ぶ。この日は2個ずつ、自宅に持ち帰った(写真下)

で野菜づくりにいそいでいる。

東京でコンピューター関係の仕事をしている長男は農作業が大好きなので、いづれ家族で農業をやることが目標だ。「市内には遊休農地があると聞くので、そうした土地を借りて一緒にやってみたい」「二階堂さんと笑顔を見せる。

「こは、いろんな人と話ができる環境をいただけて、ありがたいですね。父親の菜園を手伝った経験が役に立ちます」と話すのは助産師の服部京子さん(67年、旭川市生まれ)。いまは自宅をハーブ

ヤマトなどを栽培する程度だが、将来は農業に挑戦しようと考えている。農水省などの研究機関で野菜の育種に携わり、開設当初からの市民農業講座を指導してきた伊藤登三男さん(41年、秋田県生まれ)の元には、修了生から問い合わせのメールが届いたりする。

「中国製餃子事件が起きたこともあり、今年には応募者が多かった。身近なところで自分の作った野菜を食べたい」「安心できるものを育てたい」という意識が高まっているようです(伊藤さん)

修了後も、農的暮らしをNPOで広げる交流の輪

札幌市の農家戸数は一九六〇年を境に減り続け、〇五年にはピーク時の四分の一、千二百戸台になった。都市化と農家の高齢化、後継者不足で耕作農家が不足し、遊休農地も増えている。その一方で、食に対する市民の関心が高まり、身近な



NPO法人「さっぽろ農学校倶楽部」の農場では、学校給食に提供するスイートコーンの苗を定植。慣れた手つきで作業が進む(7月20日、南区北ノ沢で)



宿根草の購入に訪れたお客さんとの会話がはずむ細貝陽子さん

花好きで、みずから作物を育てたいと思っていたので、農業は長年の夢。「狭い面積でもやれるのはキノコしかない」と考え、十九年前に二棟のハウスで椎茸づくりを始めた。原木栽培を続けており、その濃厚な味に人気がある。市の広報で農学校のことを知り、「野菜づくりを覚えたい」と一年から二年間通った。大勢の仲間ができ、NPOの活動にも参加している。みずからの生い立ちや八百屋の経験もあるためだろう、売り方にとことんこだわる。「何を作ったら消費者が喜ぶかを考

助れると、二十人ほどの会員がカボチャの草取りやスイートコーンの定植作業などに汗を流していた。市の仲介で八十アールほどの農地を借り、日曜日になると作業用具を持参して会員たちがやってくる。共同の圃場と別に個人区画もある。障害者施設に協力し、入所者の作業実習も受け入れてきた。「昨日も会いましたね」と、副理事長の高橋浩志さん(41年生まれ)から声をかけられた。話を聞くと、十一年前に赤井川村内に取得した四十アールほどの土地を自力で開墾して野菜を作っており、赤井川と手稲区の自宅を往復する毎日とか。土曜は農学校での補助講師、日曜は北ノ沢

え農業をすること」が基本姿勢である。「うちの椎茸は、お土産やプレゼントに使う人が多いんです。(消費者にとっては)給料が下がらなかな野菜の購入にまわす金額が決まっているので、ケイキや菓子など贈答品と野菜をセットにして売ってきたい。(食費ではなく、交際費のなかに野菜の購入を入れていくと消費が伸びる。そんな仕組みを創るといい)」とアイデアは尽きない。南区藤舞に八十アールの土地を購入し、二男の敏夫さん(82年生まれ)が開墾作業を続けるかたわら、笹藪での椎茸栽培も始めた。近い将来、そこを助れる人たちが滞在型で楽しめる場所にする。「広い花畑や、キノコ王国があって、自分たちが育てた野菜を提供する庶民向けの直売所と食事処も創りたい。農業に対する理解を深め、体で感じてもらえるといいですね(細貝さん) 四人の子どもたちは、全員が札幌で暮らし、農業に興味を持っている。アイデアを出してもらいながら、中の島と藤舞の農場との両輪で新しい都市農業を創ろうと模索する日々が続く。

「相馬晩さん(元道立中央農業試験場長、故人)が書いた『2020年農業が輝く』と、理事長の高本さん(41年、上別市生まれ)が耕運機の手を休めて話す。ここは、家庭菜園に飽き足らない人や就農を志す人たちの交流や情報交換、レクリエーションの場になっている。花と椎茸で売り方を工夫直売や食事処に夢広げるすぐそばを豊平川が流れるリンゴ園の跡地で花の苗や椎茸を栽培するのは、さっぽろ農学校の一期生・細貝陽子さん(51年、札幌市生まれ)。自宅を囲むように宿根草の苗がところ狭しと並び、七百坪ほどの花畑や小さな野菜畑もある。栽培する花は五百種類ほど。椎茸や野菜とセットにしてイベントで直売したりする。口コミで顧客が増えてきた。「花がどう育ち、どれくらいの背丈になるのか」を話すときよく喜ばれる。お客さんは農家の話を聞きたいんです。野菜も売る側が食べ方を話すとい。感性が端々しい子どもの中に説明すること、次の世代が「農業をや

を説いたら、「将来、スキノで一番もてるのは農家」とあって、すっかり騙されてしまつてね。俺には先祖からの土地もあるし、従兄弟も農家をやっている。他の人より有利」という甘い考えで引き込まれたんだ」 こう冗談めかして振り返るのは、清田区有明で三年前から野菜づくりを手がける川瀬俊昭さん(50年生まれ)である。農家の末っ子だった父親が分けてもらった土地は少面積で、造園業を営みながら緑肥作物などを細々と栽培していた。川瀬さんもまた、ワイヤーメッシュ(溶接金網)の工場に勤め、農業とは無縁の生活を送る。定年後も働ける職場だったが、相馬さんの本で人生が変わった。

「花ときこのほそがよい」では椎茸の原木栽培にこだわる。「味がいい」と引く手あまたの人気だ

りた」と思えるように努力をしないとね。あきらめたら(世の中は)変わらないですよ」 細貝さんがこう力を込める。ハワフルな人だ。生産物にまつわる物語を伝えることに農家としての使命を感じている。子どもころ、野菜の卸売業を営んでいた父親について歩いた。結婚後は夫の修さん(49年、札幌生まれ)とともに豊平区内で八百屋をやっていたが、スーパーの攻勢で経営が難しくなった。



「花ときこのほそがよい」では椎茸の原木栽培にこだわる。「味がいい」と引く手あまたの人気だ

「これまで家庭菜園すらやったことがなかったんだ。トマト一つだって、農学校の実習を見て初めて分かった」 まわりはハウレンソウ農家はかり、栽培技術が分からず苦勞した。機械を購入したり、肥料代などに資金がかかり、持ち出しのほうが多かった。百万円ほど収益が上がっても生活費に消えてしまう。あちこち見て歩くうちに、少しずつ栽培技術が身につく。売り方を工夫するようになる。一昨年から、さとらんど交

流通で開かれる農産物直売市「さとのいち」に野菜や苗の出品し、お客さんの反応を見たりした。トマトとピーマン、キュウリの三品目は、土づくりや減農薬・化学肥料の技術を取り入れて生産されたブランド農産物「さっぽろとれたて」の認証を取得した。農協主催の研修にも参加し、関西や四国の直売所で売り方のコツを学んだ。「梱包をきれいにすると、珍しい野菜や目を引くものを出す、野菜の特長や食べ方を紹介する」といった工夫をしたものがよく売れていた。見学したのは正解で、要領が分かっただけでよかった。現在は、ハウス三棟と九十アールの畑で五十品目、百種類はあるという多彩な野菜を作る。トマトだけでも赤、黄、黒、緑、白の六種類。初めてわたしが目にする野菜も多い。客寄せになるし、珍しい買ってもらうという。レストランからの引き合いもある。昨年からは有明小学校東側の道道真駒内御料線沿いに直売所を設け、七月末から九月初めまでの土・日曜日に野菜を売る。「直売は好評で、一日四万円も売れてびっくりした。現金収入があるから、やめられなくなるね。定年もなく、おもしろい仕事だから体の続く限りやりますよ」と川瀬さんは意気軒昂である。

「さとのいち」に設けた川瀬さんの販売コーナー。色の違う野菜を詰め合わせるなど工夫を凝らす(「さとらんど交流館」で)



新しく農業に参入する

「一気に就農とはならないので、まず農業に関心を持って段階的にやってみていき、次のステップとして(後継者のいない)高齢農家のところへ応援に出向く形になる」とい。修了生は各期ごとにグループをつくらせたり、畑を借りて技術アップを図る、苗を提供しあうなどの活動を続けています。これが将来、大きな輪になり、役に立っているのではないかと

「新規就農のハードルは高く、半年間の生活で、ようやく軌道に乗ってきた。その歩みは、これから就農を志す人たちに大きな刺激を与えることだろう。」

いぜん高い就農のハードル 半農半Xも選択肢の一つ

とかく農業にまつわる暗い話題が多いなか、果立った人たちの生き方はさわやかである。が、誰もがそう簡単に就農できるわけではない。

産で一年分の収入を得ることは難しい。働く時間を気にせず、作ることを楽しめないと長続きしないでしょう。うまくやっている人は、他人と違うアイデアがあり、努力しています。情報を集め、ひたすら見て歩き、「どうすれば売れるのか」「どんな農業をするのか」を考えることが大事。農学校に通って頑張っている先輩から話を聞いたり、異業種交流をしてみることをお勧めします」

と細貝さんがアドバイスする。

七年間にわたり受講生と付き合ってきた講師の伊藤さんは、こう言っています。



珍しい花キャベツ「アチヴェール」を前にする川瀬俊昭さん。3年前から野菜づくりに挑戦し、直売に活路を見いだしてきた

には、技術の習得とともに、施設や機材などの購入資金や農地の取得などのハードルがある。今回登場した二人のケースは身内に農地の所有者がいたわけで、みんながそうした条件にはない。わたしが暮らす道北の過疎の町では農地価格も格安だが、道都・札幌では高価である。相続問題もあるので、農地の賃貸には農家の警戒心が強いようだ。熱意のある人には借地農業が可能ではあるが、伊藤さんの提案のようなやり方が入っついていきやすいのだろう。

- プロの農家を志す人とは別に、「半農半〇〇」の生活スタイルが増えていくとい。
- わたし自身も「半農半ライター」を続けて
- いるが、札幌には身近に大勢の消費者が
- いる地の利がある。農学校での経験を
- かし、小さくても楽しい農業」をめざす
- 人が増えてほしいものだ。
- 市民農業講座「さっぽろ農学校」
- 札幌市東区五珠町569-10
- ☎011-787-2220
- ☎011-787-2221
- NPO法人「さっぽろ農学校倶楽部」
- 札幌市南区北ノ沢1865-5
- ☎090-3018-0847
- 花ときのこ「ほそが」
- 札幌市豊平区中の島1条14丁目2-16
- ☎090-8635-0508
- プチファーム川瀬
- 札幌市酒田区有明139
- ☎090-2696-0063